

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

春野台高校陸上部に所属する、神谷(〓俺・三年)、一ノ瀬(〓連・三年)、桃内(〓二一年)、鍵山(〓一年)の四名は、四〇〇メートルリレー(〓四継)の選手である。南関東大会で予選を通過した彼らは、顧問の三輪先生とともに、明日の決勝戦に向けてミーティングをしている。

「でな、鍵山、俺が言いたいののは、そのことじゃねえんだ。一ノ瀬は確かにしつかりバトンを受けてくれる。だがな、今日、おまえは、あれだけ緊張して走りがめちゃめちゃだったのに、すぐく丁寧ていねいにきれいにバトンを渡したよな。俺は、正直、おまえが前みたいにガッツと突っ込んでいってバトンをたたきつけて空振りするかと思ったよ。でも、それはなかった。つまり、アンダーアンダーの正しいバトンワークは、もうおまえの身体にしみついていてる。どんな状況でも、おまえはちゃんとバトンワークできる。すごいことだよ。ウチのチームで一番心配なのが、その点だったんだからな」

先生の言葉に鍵山はうなずいた。

「①すごいことだよ」

先生は繰り返した。

「桃内も、もうう時に詰まって、渡す時に流れたあげくに詰まって、悪夢が現実になったようなバトンだったのに、つないだよな？」

「はあ……」

桃内はどう答えたらいいのかわからないようだった。

「ありやーな、どっちかで落としてるよ。かなりの確率で。あれを落とさずにつなげたのは、おまえだからだ。たいていのヤツなら落としている。ぎりぎりのところでなんとかする、それが桃内だ。粘り強い。一ノ瀬とはまた違った意味で柔軟性のあるバトンワークができる」

桃内はうなずいた。

「詰まって、流れて……、今日のバトンは、おまえがずっと恐れていたことが実現しちゃったわけだな。最悪が実現したわけだ。さっき言ってたろ、これ以上悪くはならないって。最悪でもつなげたんだ。②すごいんだよ」

「そうやるか」

桃内はつぶやいた。

「そうだよ」

三輪先生は力強くうなずいた。

「一ノ瀬と神谷はよく走ったな。バトンがつながりさえすれば、走って挽回ばんかいできるってことを証明できたわけだ」

「それはー」

俺も連も首をひねるのに、

「いいんだよ。予選を通ったんだから」

三輪先生は強い口調で言い切った。

「そりゃあ、おまえら、バトンゾーンからちゃんと加速できてりゃ、もう一人くらい抜けただろうけどな」

それから、三輪先生に言われて、それぞれの区間のバトンの反省と打ち合わせをした。明日、一〇〇mの決勝に残れば、俺も連もリレーは四本目になる。その疲労は計算しないといけない。でも、それを今日から考えろというのもむずかしいものがあった。

「③そのへんはな、当日のノリと勘だよ」

三輪先生はそう言った。

明日は、俺たちが一〇〇m決勝に出たら、リレーの前に、バトン合わせをやる時間はない。④二走、四走がいないと、鍵山と桃内に時間があっても、合わせはできない。とにかく、今日の反省をとことんやることで、明日を展望するしかないんだ。

「 A

桃内に確認した。

「 B

桃内は考えた。

「そうやね。そうかも。あ、早いー思いましたわ。けど、俺の調子が悪くてそう感じたのかもしれへん。身体が思うように進まへんかったわ。なんやるね、重いゆうか……」

「 C

「 D

「 E

フラットレースの決勝で何度か経験した「G」。重力、重圧。とにかく身体が動かない。

「明日は、とにかくおまえをよく見るよ。連みたいに、本能を研ぎすませて」
「そや、ケモノになつてくたさいよ」

桃内は笑った。

「俺もならんとなあ。みんな、ケモノや」

「ケモノか……」

果てしなく積み重ねてきた練習、その練習通りにやれば、いい結果が出るはずだった。でも、できなかった。そして思い知らされたのは、練習通りとか、フツウとか、そんな単純なものじゃないってことだ。⑤レースは生き物だ。四継のレースなんて、もう暴れ馬だ。関東の決勝という大舞台で、暴れ馬を乗りこなすには、日頃の熟練だけでは足りない。熟練の技を生かすも殺すも、レース本番のその場の勘と本能にかかってくる。

「俺、明日は、今日よりはマシに走れると思います」

桃内はきっぱり言った。

「俺もそう思うよ」

「いつも通り、いうことで」

「いつも通りで」

俺たちは結論を出した。⑥あたりまえの結論を、ぐるりと大まわりして考え抜いてポンと出した。

(佐藤多佳子『一瞬の風になれ』より)

【語注】

*1 アンダー ……アンダーハンドパス。技術的に難しく形だけを完成させるにも相当な熟練を要する。

*2 フラットレース…陸上競技でハードル走・障害走等を除いたトラック競技種目。

問一 ——①「すごいことだよ」・②「すごいんだよ」とありますが、それぞれの「すごい」こととはどのようなことですか。説明しなさい。

問二 ——③「そのへん」の指示する内容を答えなさい。

問三 ——④「二走、四走」について、「二走」とはリレーで二番手に走る選手、「四走」とは四番手に走る選手です。では、このチームを走者順に並べるとどうなりますか。次のア～エから正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 神谷↓鍵山↓一ノ瀬↓桃内

イ 一ノ瀬↓神谷↓桃内↓鍵山

ウ 桃内↓鍵山↓一ノ瀬↓神谷

エ 鍵山↓一ノ瀬↓桃内↓神谷

問四 「ア～Eにあてはまる会話文としてふさわしいものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア「緊張だな」

イ「Gがかかったんだ」

ウ「いやー」

エ「そうやろか？」

オ「俺、出が早かったか？」

問五 ——⑤「レースは生き物だ。」とありますが、これはどういうことを言おうとしたものですか。三十字以内で説明しなさい。

問六 ——⑥「あたりまえの結論」とありますが、これはどういう内容ですか。四十字以内で説明しなさい。

□ Aの文章は、昭和十六年八月十日の『北海道帝国大学新聞』に載せられたもので、Bは最近の新聞記事です。この二つを読んで、あとの問いに答えなさい。

A 明治の初年、北海道開拓のはじめのころには、山野に鹿が群棲していたという。この鹿の肉をめあてに、缶詰工場が設けられたり、札幌農学校の生徒の食料に、鹿の肉が大いに用いられたという記録も残っている。ずっと後まで、今は札幌市内有数の住宅地となっている桑園という地域が、畑として(あ)タガヤされたころは、土の中から古い鹿の角がひよいひよい現れ、さらに昔は原野の枯草に火をつけて焼き払い、現れる鹿の角を拾うのを商売にしたものもあつたそう。このおびただしい鹿が未開の山野に縦横に道をつけるので、道路の完備しない時代にも、北海道の内地は、比較的容易に騎馬で旅行が出来たものだと言われている。北海道の先住民にとつて、この鹿が重要な狩猟のゲームの一つであつたことは当然で、彼らの生活における鹿との関係は、相当密接なものがあつたと思われる。従つて、北海道のアイヌの地名には、ユクオペ、ユクペツ、ユクオロナイ、ユクトラシというように、ユク(鹿)のついたものがたくさんある。

ところが、この鹿が、現在は日高や十勝などの山奥に、わずかばかり残っているだけで、ほとんど絶滅に瀕している。その原因は、明治十一年の冬から十二年の春にかけて、北海道一円に希有の豪雪があり、鹿の冬期間の食物である灌木や若木の芽が深雪の下に埋められてしまったために、おびただしく繁殖していたこの可憐な動物どもにとつて、極めて深刻な食料の不足を来し、餓死に陥つたと思われるものも多く、春融雪後に、山野のところどころに群をなしてたおれている鹿の屍を見たとき、古老は言っている。その後北海道の鹿は絶対禁猟となつて保護されているが、少しづつは増えているようだともいわれるけれども、我々が日高山脈あたりを歩いても、ついぞその影だに見ることのない状態である。

鹿の全盛時代には、シベリア系の狼がおびただしく繁殖していたそうだが、彼らは、主たる食料の鹿が急に減つたので、背に腹はかえられず、やたらと放牧馬などを襲つたのが運の尽きで、子馬の狼害が多く、繁殖の成績が挙がらないのに業を煮やした開拓使は、懸賞で狼狩りを励行し、一頭何円という値で買い上げたから、もともと群居性の彼らは、毒殺法によつてたあいなく殲滅され、①全くそのあとを断つてしまった。北海道産シベリア狼の(い)イブツは、札幌の北大農学部博物館に剥製が二つと、ロンドンの大英博物館に頭骨の標本が残っているばかりである。

②鹿や狼に比べると、北海道名物の熊は、割合に数の減り方が徐々であるらしい。熊は狼のように群居せず生活をしているから、人間を向こうにまわしても、せいぜい親子もろとも撃ちとられる位で、一度に多数が捕獲されるということがなく、また彼らは雑食性で、木の実、草の根、さまざまの農作物のような植物性のものから、昆虫、魚、はては牛馬、時には人間まで、手あたり次第に飢えては食を選ばないから、鹿や狼のように深刻な食糧難に陥るおそれが少なく、その方面から繁殖を制限されることもないらしい。従つて、近年に至つても、日曜ごとにスキーヤーが踵を接する手稲山麓あたりの、しかも普通のスキーコースから数町しか離れていないところに、穴ごもりをしていた熊が発見されたり、人里近くの畑が熊に荒らされたりもする。年々捕獲される頭数も、平均してみると大差がなく、今までのところでは、絶滅を懸念させるような著しい減少の傾向は見られないという。しかしもちろん昔に比べれば北海道の熊のポピュレーションが減少したことは疑いもない。

とにかく、鹿にしる狼にしる熊にしる、人間の数が増すにつれて減つてゆく。その他の野獣野鳥も、おいおいにその生活する領域を狭められ、数は減少する一方である。しかるにイタチのように、近年偶然の機会に内地から渡来して、おびただしく繁殖したというような例外もあり、またいろいろの雑草などのように、はるばるアメリカあたりから伝来して、もてあまされているものがある。そうかと思つと、原始の森林はほとんど伐採され、泥炭地は開墾されて干上がつてゆき、高山植物などは、ずいぶん厳重な保護規則が設けられて、いとも厳重に保護されているけれども、比較的手近なところは、すでに荒廢に帰して昔の面影もない。要するに自然のフアウナやフロラは、中途半端ないわゆる文化とは両立しがたいものらしく、私は大正の初めに札幌に来て、爾来三十年、北海道の自然を眺め暮らしてきたが、札幌の市内あるいは隣接郊外における変化だけでも著しいものがある。まして明治の初めに渡来されて今日に至つた古老たちの、脳底に印象されている自然変移の過程は、けだし驚くべきものがあるであろう。この古老たちが、折にふれて語られる昔の有様の片鱗は、われわれの胸臆に実に深い感銘を与えるのである。

文化の進展のためには、自然の破壊もやむをえないことかもしれぬ。しかしながら、なるべく自然を破壊しないで文化を進めることがより望ましく、自然の破壊が著しい割に、文化の進展は大したことないというのでは、天道さまに相済まぬわけである。人間の精神が非科学的で非文化的である場合に、文化のためと称して、むだな自然破壊が行われやすいように思われる。ひとり北海道とのみならず、日本全体について、自然の破壊を埋め合わせるほどに日本人一般が文化的に向上したか、むだな自然の破壊が多すぎはしないか、天道様に相済まぬような仕儀がありはしないか、そこにわれらの疑問があり、反省がなければならぬと思う。われらの祖先以来子孫までが、そのうちにはぐくみ育てられる祖国の自然に対して、われらは十分に謙虚であり、これを愛護する点においてやぶさかであつてはなるまい。最小限度の自然破壊によつて、最大限の文化の進展を期するところに、真に文化的な人間の気持ちがあるのだと思う。文化のためと称して、むだに不必要な頭の悪い自然破壊をして省みないのは、これこそ非文化的である。

科学そのものがいかに日進月歩しても、その運用応用において人の精神が非科学的であつては、十分な能率はあがらない。その意味において、科学の振興ということは、科学の分野だけにとどまらず、広く政治経済の部門にまでおよぼされるべきであろう。つらつら今の世相をながめていると、国民全般に大いに科学的精神を作興する必要があるように思われる。特に政治経済方面の指導者たちの

もの見方考え方が、あくまで科学的であってほしいということが痛感される。

(栃内吉彦「北海道の自然と文化」『北海道帝国大学新聞』昭和十六年八月十日刊より)

B エゾシカ釧路湿原全域に タンチョウウに接近

北海道新聞社は十四日、環境省などの協力で、ラムサール条約登録湿地の釧路湿原全域で本社ヘリによるエゾシカと特別天然記念物タンチョウウの生息状況調査を行った。釧路湿原でのシカの生息はよく分かっていなかったが、湿原北東部を中心に一五八頭見つかり、シカの「通り道」が湿原全域に張り巡らされている実態を確認した。川で羽を休めるタンチョウウのそばにシカの群れも見られ、同省などはシカの増加が湿原の植生やタンチョウウの営巣環境に影響しかねないとみている。

調査は湿原保全やタンチョウウ保護が目的。ヘリには本紙記者とカメラマン、同省釧路自然環境事務所職員三人、NPO法人タンチョウ保護研究グループ(釧路市)の百瀬邦和理事長が搭乗し、湿原周辺の丘陵地を含む約三万ヘクタールの上空を、北から二キロ間隔で東西に往復し、約三〇〇キロ飛行した。

シカは北部や東部に集中し、湿原中心部や南部は少なかった。最大の群れは二〇頭。中心部に少なかったのは三月上旬の降雪で、餌となる植物が雪の下に隠れ、移動も困難になったためとみられる。

また、シカは捕獲が認められていない鳥獣保護区内で特に目立った。撃たれないことを学習して逃げ込んでいる可能性もある。同省は今後、現地調査を行い希少植物の被害や、踏み荒らしによる乾燥化などの分析を進める。

一方、タンチョウウは一三二羽を確認。まだ大半は、餌が少ない冬季に設けられる釧路管内鶴居村の給餌場やねぐらとなる川におり、九つがい春の産卵に向けて営巣準備を始めていた。百瀬氏は「シカの増加でツルの営巣や抱卵が邪魔をされかねない」と話している。

道東(釧路、根室、オホーツク、十勝管内)のエゾシカの生息数は一九九三年には推定二十万頭だったが、現在は約二十五万頭にまで増加し、餌を求め湿原に入り込む姿が目撃されている。タンチョウウも増えており、釧路管内を中心に約一三〇〇羽が生息している。

『北海道新聞』二〇一二年三月一五日期刊より)

【語注】

- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------------|
| *1 灌木 | ……低木。 | *2 開拓使 | ……北海道の行政をつかさどる役所。 |
| *3 殲滅 | ……全滅させること。 | *4 数町 | ……町は約一〇九メートル。 |
| *5 ポピュレーション | ……人口。生息数。 | *6 ファウナやフロラ | ……動物相と植物相。 |
| *7 作興 | ……ふるい起こすこと。 | | |

問一 ——(あ)・(い)のカタカナを、正しい漢字に改めなさい。

問二 ——①に「全くそのあとを断ってしまった。」とありますが、狼が絶滅した理由を答えなさい。

問三 ——②「鹿や狼に比べると、北海道名物の熊は、割合に数の減り方が徐々であるらしい。」とありますが、その理由について鹿や狼と違って熊には、(1)どのような習性がある、(2)どのような習性がなかったからだ、と筆者は述べていますか。それぞれ文中の語をぬき出して答えなさい。

問四 Bの新聞記事について、釧路湿原でのエゾシカの生息数の増加によって考えられる悪影響や被害として、次のア～エからあてはまらないもの一つを選び記号で答えなさい。

- ア 釧路湿原の希少植物への被害
- イ エゾシカの踏み荒らしによる釧路湿原の乾燥化
- ウ タンチョウウの営巣や抱卵への悪影響
- エ エゾシカの移動が困難になったという事態

問五 Bの新聞記事によれば、釧路湿原でのエゾシカの生息数増加の原因と考えられることはどのようなことですか。答えなさい。

問六 Aの文章と、Bの新聞記事から、今後われわれ人間は、自然や動植物についてどのように対処しなければならないと読みとれま

すか。それをまとめた次の文章の□部分にあてはまる内容を答えなさい。

われわれは自然に対して、非文化的な人間中心の考えをもたずに、十分に謙虚に自然を愛護しなくてはいけない。また、単に動植物を保護するというのではなく、

㊦ 次の文章は、筆者が六人の現代作家の小説を「シングル・ルームの文学」としてとり上げ、現代日本の死生観について論じた作品の一部です。この文章を読んであとの問いに答えなさい。なお、本文には設問の都合上省略した部分があります。

シングル・ルームの文学には、どの作品にも必ず「死」が出てくる。いまや死は病院と医師が管理し独占するものになってしまったようであるが、しかし目を開いてよくみれば、われわれのまわりには、いろんなかたちの死が、何とさまざまにうようよと存在していることであろうか。今日の日本の「豊かさ」によっても解消できない大問題が、死ということである。

脳死や(あ)ゾウキ移植など、医学が扱うことだけでは、とても片づかないテーマが、もともと死というものにはあり、①それがたとえば文学にも結晶しているのであるが、病室で死を迎えるのが慣例になり、(い)リンジュウにたちあうことが少なくなるにつれ、死の文学が少なくなってしまうた。ハイテクの葬儀で、ドライアイスの野辺おくりをすませると、あとはもう忘れてしまうという(Ⅰ)ひとがふえてきた。このことと、シングル・ルームの文学の登場は、決して無関係ではない、とわたしは考えている。

その人が死んだからといって、その人のすべてが、すぐさますべて、なくなってしまうわけではない。まだ残り火として、魂の輝きはまわりの人びとにのこっているし、かつてと同じ効果が、しばらくはつづくことが多い。もうとづくになくなっているはずのものが、まだあちこちに残り火のように、(Ⅱ)つづけているということは、決してありえない奇跡ではない。(a)荒唐無稽なことでもない。

どこかうまく言えないけれど、亡くなったひととは私にたいして、いつも何かをしなくてはということをおぼせる。②それは亡くなったひとに対する、生きてのこされた者の、ある種の義務のようなものではないのか。

そういうことに対して、いわく言いがたいものを③もどかしいながらも表現していく。これは何も文学だけの課題ではない。(b) (c)人間として生きていく上でもっとも大切な問いかけなのだ。そういう微妙な現実のリアリティについて、はやくから直感している若者たちの声を④代弁したのも——いくらオブラートにくるんで、甘くしてあるが——が一連のシングル・ルームの作品であろう。いまにも崩壊しようとしている文明社会のなかで、(c)立て直さなくてはならないのは、人と人との関係である。(d)、多くの現代人が現実の「関係」のなかで、自分の傷つくことを恐れて、自分をみせない、他人のことも見たくない、という生き方のかまえを変えないかぎり、いまの「そこなわれた関係」をたて直すことはむずかしい。

拡大家族から、核家族へうつり、いまはシングル・ルームの時代になった。ワンルームマンション、カプセルホテル。単身赴任。近所付きあいを否定した、おとなりのお葬式。⑤シングル・ライフ時代は花ざかりである。

シングル・ルームの文学を読んでいると、すべての土台の安全ということが前提にあり、その舞台のうえで、のんきにあそんでいる子どもという印象を受ける。そこだけ、きれいに切りとって、それで話をすすめているという印象が拭えないかぎり、まだ⑥子ども

の文学であり、未成年の人生論だという感じを受ける。「ひとりである」ことは、自分のまわりを空白だとみなすことではない。卵が卵のまま孵化しなくてもよいというのではない。卵のまま、贅沢を覚えシングル・ルームに閉じこもろうとする者は、雛にはならないで腐っていくであろう。この道をいけばよく生きられる、という道しるべがたとえ立派でも、努力して自分で歩かない者がおとなになることはない。

われわれにとつて隠れ家であり避け所である「家族」というのは何なのか。「シェルター」というのは、いったいどこにあるのか。自分一人の「サンクチュアリ」というのはどこにあるのであろう。

なぐさめ、やすらぎ、憩い。「だれも知らない、だれもおかすことのできない、とても清らかな場所」「落ち着いて、白くて、だれもがじんとして泣きたくなるような明るくてきれいな場所」そういう形どおりの(う)シンセイな区域など、どこにもない。現実はずとどぎまどどろどろしている。変わりばえのしない、古くさいものかもしれない。われわれの生きる支えになってくれるものは、平凡な日常性とか、具体的な他者との関わりなしにはありえない。われわれはいま、シングル・ルームの外にも出ていかなければならないのではないか。

あかるく、健康そうにみえるが、現代では人びとは、たいていどこかで慢性のかるい病にかかっている。これが『死にいたる病』のなかでキルケゴールのいう「絶望」である。GNPが高くて、多くの日本人のこころはいま病んでいる。身のまわりに、くだらない贅沢品はたくさんあるが、本当にほしいものは何もない、というのではさみしすぎる。

ここにあるのは生の感情ではなく、加工された感情である。それは頭も背びれもある魚がならぶ魚屋ではなく、キレイに切り分けられ、パックされ、名前だけがプリントアウトされたスーパーマーケットのようなところなのだ。

「他者」のいない人生は空虚である。人はだれも、自分にむけられるまなざしを必要とする。その限りでは、自分も⑦まなざしのキャッチャーにとどまらず、まなざしのピッチャーにならなくてはならない。親友、家族、ペット、死者、世界などには、おそらく無限のひろがりがある。ひとはいくら家族がいても、仲間がいても、やがてかならず「ひとり」になる。いや、いますでにひとりなのだ。

世のなかは不完全な人間の集合体である。だれもが生きていくことのつらさを背負いながら、その一方で心休まるシェルターを求めている。自分をわかってもらいたい人が、相手のことなど考えたくない、というのではなく、自分をわかってほしい人は、相手をわかろうとしなければならぬ。そのようにして、ひとは自分を必要とする相手を知り、相手を必要とする自分を知るのである。他者に自分を受け入れてもらいたい人は、自分のなかにも他者を受け入れることが必要なのである。

(小原 信『シングル・ルームの生き方』より)

【語注】

- * 1 荒唐無稽 ……非現実的で、根拠がないさま。
- * 2 サンクチュアリ ……^{おか}侵してはならない大切な場所。保護地域。
- * 3 キルケゴール ……デンマークの思想家。人生の意味について考えた。
- * 4 GNP ……国民総生産。現在は多く国内総生産(GDP)を用いる。

問一 —— (あ)(う)のカタカナを正しい漢字に改めなさい。

問二 —— ①・②の「それ」の指示する内容を答えなさい。

問三 —— () I・IIにあてはまる語として最もふさわしいものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

I			
ア	薄幸な		
イ	薄弱な		
ウ	薄情な		
エ	薄命な		

II			
ア	かさなり		
イ	くすぶり		
ウ	さすらい		
エ	せめぎ		

問四 —— () a～dにあてはまる語の組合せとして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア	a	むしろ	b	まず	c	しかし	d	また
イ	a	それに	b	まず	c	しかし	d	むしろ
ウ	a	まず	b	そして	c	むしろ	d	また
エ	a	また	b	むしろ	c	まず	d	しかし

問五 —— ③「もどかしい」、④「代弁した」の意味として最もふさわしいものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

③			
ア	遠慮しなければならぬ		
イ	思うようにならない		
ウ	気になってしかたがない		
エ	結論は出せない		

④			
ア	言ってはならないことを話した		
イ	大きな声で話した		
ウ	他人のために言い訳をした		
エ	本人のかわりに話した		

問六 —— ⑤「シングル・ライフ時代」とありますが、「シングル・ライフ時代」の生き方とはどのようなものですか。それを説明した部分を本文中から四十字以内で探し、最初と最後の五字をぬき出して答えなさい。

問七 —— ⑥「子どもの文学であり、未成年の人生論だ」とありますが、「子どもの文学」「未成年の人生論」とはどのようなものですか。説明しなさい。

問八 —— ⑦「まなざしのキャッチャーにとどまらず、まなざしのピッチャーにならなくてはならない。」とありますが、「まなざしのピッチャーになる」とはどういうことですか。説明しなさい。